

「クロマトグラファーとして」

小森将貴

私が HPLC や GC などの分析機器を本格的に使い始めたのは、社会人になって間もなくの頃で、医薬品の製造販売承認申請を行う際に提出しなければならない各種資料を作成するために必要な試験方法の設定や、データ採取を行うことがきっかけであった。当時の装置といえば、例えば装置に試料を注入する場合はマニュアルインジェクターであったし、HPLC のカラムは市販品を購入して使用していたものの、GC のカラムについては、ガラスカラムに充填材を手で詰めて使っていたものである。

日々機器の前に座り向かい合わせの状態にいるとき、周りの人から、機器に何を話しているの？と聞かれることが多々あった。自分では意識していないが、機器を操作している間に、機器に向かっていろいろと話しかけているのである。そのうち、各機器の個性や性格のようなものまでわかるような気になり、調子が悪いときは心配し、良好に作動してくれたときは自然とほめているのである。

これまでに、出張等で職場を留守にする度に、かなりの頻度で電話がかかってくることもあった。決まって機器の調子が悪いというもので、対処法を伝え様子を見てもらうこととし、先を案じながら職場に戻ると、戻った途端に直りましたの声。何をどうしたのか聞いてみると、何もしていない、これから職場に戻るとの連絡を受けた途端、何事もなかったかのように直ってしまったというのである。そういえば、出かける際に、「今日は出かけるからね」と声をかけ忘れて出てきたことに気がつく。周りから見れば、怪しげで、おかしな人と映っているに違いないと思うため、誰にも明かさずにいた。

最近になって、ある分析機器メーカーの HPLC 技術情報誌に、大阪医科大学 予防・社会医学講座 法医学教室 准教授 土橋 均 先生が「分析装置と付き合い心得」と題して寄稿されていることを知った。その中には、「装置を可愛がれ」という心得があり、分析装置は生き物と同じ。粗末に扱えば良いデータを出さないし、十分に世話をして最高のコンディションを保てば、最高のデータを出してくれる。分析前後にはメンテナンスを怠らず、常に装置の調子を把握しておくことが大切である。その上で、大切な分析の前に「頼むよ」、良いデータを出したときに「さすが」と声をかけてやれば、不思議と良いデータが得られる。と、記述しておられる。この寄稿を読んだ時、ここにこれまでの全てが集約されていると感じた。

企業においては、誰でも操作できるようにと、まず操作マニュアル作りを行う。操作の自動化が進んだ機器は、マニュアルに記載された通りに操作すれば、たとえ多くの知識や経験がない人でも、機器の性能を十分に活かした測定データを得ることができるようになってきた。しかし、そのようなデータが得られる背景には、日頃のメンテナンスがものをいい、確かな技術に裏打ちされた部分があったのである。

装置の自動化など技術進歩によって、それまで測定のコツごとくに試料の注入を行なわなければならなかったり、機器に張り付いて操作しなければならなかったり状態から開放された恩恵の裏には、自動化される前の状態を知っているからこそであり、定期的な部品の交換やメンテナンスを通して機器の構造や動作の原理を、実際に目にして手にとって理解することこそこれからも必要なことで、自動化される前の機器を操作したり、メンテナンスしたりできたことは貴重な経験となっている。

検査分析士上級の資格取得の際、面接官の方との会話で出てきたのは、今、企業が必要としているのはオペレーターではなく、機器に精通し、トラブル対応ができる人材だということ、そして検査分析士資格認定制度の目指すところはそこにあるということである。装置の操作など日常業務の表面的なところに目を向けがちである流れから、装置を取り巻くあらゆることに興味や関心を持てる人材こそ本当のクロマトグラファーであるということである。

この検査分析士の資格を通じて、時代が変わっても決して変わることはない分析の基礎の部分大切にしながら機器に関する豊かな知識や技術を持ち、何よりも機器を生き物としてとらえられるクロマトグラファーを目指していきたいと思っている。